

第2回京都市水共生プラン基本方針策定委員会議事要旨

日 時 : 平成 15 年 11 月 16 日 (日) 午後 2 時～4 時 35 分
場 所 : 京都市勧業館 (みやこめっせ) (京都市左京区岡崎成勝寺町) 大会議室
出 席 : 中川委員長, 上田委員, 嘉田委員, 栗山委員, 関根委員, 野田委員,
藤井委員, 山本委員 (以上 8 名)
欠 席 : 増田委員

(開 会)

(弘元下水道局理事挨拶)

(嘉田委員自己紹介)

(議事確認) 事務局より説明

(講 演) 嘉田委員よりの水文化をテーマにしたご講演

(資料説明) 事務局より配付資料 (水文化) の説明

(水文化について討議)

中川委員長 有栖川の住民活動は多摩川の例と似ている。多摩川は水質が悪いことから住民参加が始まった。有栖川の場合の住民参加の経緯, きっかけはなにか。

事務局 有栖川の河川改修に伴う, 住民意見の把握がきっかけである。また, 梅津の町づくり検討会という組織があり, それと一緒にいった。

嘉田委員 事業をするにはコミュニティ的受け皿が熟成していることが重要である。また環境などの問題を考えている中で川の問題が取り上げられたのであり, 最初から川だけというコミュニティはない。京都はもともと地域自治会, 町内会などコミュニティができており, そこに如何にうまく行政の仕組みを取り入れていくかが重要である。

しかし, 若い人があまり育っていないくて, 中高年の人たちが中心になってしまっている。若い人たちが, 特定のテーマではなく, コミュニティ的な活動にどう関わり, それを育てていくかが課題である。

上田委員 文化と言うと, ジェンダー (性差) という視点もある。文化的, 社会的に作られた性別毎の役割がある。一般的に女性の方が家事, 炊事, 洗濯などで水に接することが多いため, 水に対してもったいないという意識が高く, 女性の視点でのとらえ方があるのではないか。

野田委員 堀川のワークショップに参加していたが, その中では旧住民と新住民間の心のギャップ, コミュニケーションの取り方が難しかった。堀川のワークショップでは旧住民の考え方があまり反映できなかったのではないか。このことは, 実際に実施する人たちに対して押しつけになっているのではないかと感じており, 今後も住んでいく人たちとのコンセンサスの取り方, 対話の取り方が難しかった。

これらの差を埋める取り組みが必要ではないか。

栗山委員

最近、伏見で活気があるのは十石舟の運航で、利用が増えている。

宇治川派流の河川清掃を十数年前から実施しており、最近は「伏見夢工房」という第三セクターが引き継いで、有志によって実施されている。

舟を運航するには「藻」の清掃をしなければならない。「藻」が生えないようにならないか。川岸に蛍が生息するなどの自然再生もいいが、このような問題も生じる。

十石舟は嘉田委員が言う心（こころ）系の文化の舟遊びである。また、観光客だけでなくもっと地域の人たちも利用して欲しい。水辺から街を見ることで、水の町であることを認識し、水から見た場合の住民としての反省点が見えることなどがある。

川底をどのように整備するかなどを専門家、住民の意見を交えて川を整備し、住民が住んでいて良かったと思えるような川の再生を図ってきたい。

山本委員

堀川のワークショップに参加して、地元の方などから話を聞いて、初めて堀川の歴史などについて知った。しかし、そのようなことは若い人たちには伝えられていないと感じ、若い人たちは興味がないのかと思った。

学校の授業などをみると、若い人たちでも川、水質調査、生態系などに興味を持っている人が多くいるが、地域の人とコミュニケーションできていないのではないかと感じる。地域などで話をしていけば、若い人たちが興味を持ち、次世代に伝えることができるのではないかと感じる。

地域の人たちで十石舟に乗る人たちは少ない。

身近にある濠川の近くでは、地域の人々が清掃に参加しており、参加者には小中学生など小さい子も多く、このようなことは実施していくべきである。

藤井委員

水の見える場所が昔に比べて減った。京都は比較的水の見える場所は多いが、大阪などはほとんど暗渠化され水が見えなくなった。暗渠にしているが、見える形での水の利用を考えても良いのではないかと感じる。

雨が降ると側溝に流れて川に流出するというのが普通だが、今は直接、雨水管に流して地下を流れるので、水の流れた形跡すら残らない。雨を地下で流すのもいいが、なるべく目に見える時間を長くする水の流し方を考えるべきではないかと感じる。

阪神大震災などを通じて緊急時の水利用として鴨川を利用できるようにすればよいのではないかと感じた。

関根委員

今後は地域住民との関係は重要になってくる。

住民参加ということで、住民意見を反映することは重要であるが、行政手続きの中でどのように位置づけるのかが難しい。

予算、人的資源の制約の中で行政のやるべきことは増えていくが、やれることは限られているので、住民に丸投げをすることも必要ではないか。住民参加ではなく住民主体でやっていくという発想の転換だ。

官でもなく、民でもない NPO など第3の役割を担うということは、これからの社会の運営で重要になってくる。

地域の中には専門の知識を持っている人たちが多くいるので、町づくりの中で河川改修などを考える場合は、行政が意見を聞くのではなく、地域住民に丸投げして実施する。それを行政がどういう形でサポートできるのかが重要である。

行政が提供した予算の中で住民に実施してもらい、それで不足する部分を行政がサポートするという、住民主体の活動を行政がサポートする仕組みを考えていく必要がある。そのような思い切った発想の転換をしないと、これからは住民参加と言うことで住民意見を聞いても反映できないことで、住民のやる気をそぐ可能性もある。住民主体で行うべきではないか。

事務局 堀川、有栖川はどの程度まで具体化されているのか教えて欲しい。
堀川は基本構想ができあがり、詳細設計を行っている。来年度から第二疏水から水を引く導水路の工事を行う予定である。

有栖川は下流から河川改修の工事中で、今後はワークショップで提案された公園と一体化した整備などを実施していく予定であり、ワークショップの成果が目に見える形で現れる。

中川委員長 住民参加ではインセンティブ、動機付けなど目標があつてこそ、皆さんの関心が高まっていく。コミュニティが大事と言っても組織作りは難しい。

堀川でもコミュニティを作るのは、いろいろな価値観の人がいるので難しい。堀川を考えると、「水のない川は川か？」という認識からスタートしている。

住民側の要望は水量を確保するということから出てきて、川の形はそれからつくることとなる。そのため、堀川の水源をどのように確保するのかということが問題となった。

このようなことから、町なかの水を確保するためのプランを作成することになり、そこから皆さんの関心が寄せられ、コミュニティの発展に繋がるのではないかな。

有栖川の場合は行政が実施すると、今までと同じような3面張りの河川改修をするのではないかなという思いから、環境にふさわしいものをつくろうということが動機付けとなっているのではないかな。

行政は第一級の専門家であることを認識して欲しい。しっかり勉強して住民への説明やサポートをして欲しい。

(休憩)

(講演) 藤井委員よりの水環境をテーマにしたご講演

(資料説明) 事務局より配付資料(水環境)の説明

(水環境について討議)

嘉田委員 水文化には物(もの)系, 出来事(できごと)系, 心(こころ)系があり, その中で心系を重視して, 水環境と水文化をどのようにつなぐのかということと言及したい。

今までは, 水に係わる衛生工学の分野では科学(サイエンス)が優先されていたが, 住民参加を考える場合には心系の視点を入れることが大切である。地域の人々は BOD などの水環境評価指標の数値などでは理解していない。透明度が高い, 臭いがしないなどの五感や, 子供が遊べるのか, その水を飲めるか, 魚がいるか, その魚を食べられるかなどの行為(こうい)系で捉えている。水環境の指標に心系, 行為系の指標を取り入れることは水環境と水文化をつなぐ接点である。そのようなことを学校教育で実施していることは良いことである。一方で, 五感で透明と感じていても, 毒物汚染の問題などもあるため文化の方から科学(サイエンス)につなげることも必要である。

住民とつなぐことは, 住民が心で思う, 日常の五感で感じるところをサイエンスによって結びつけることであり, これは, 住民参画ではなく行政参画ということにつながるのではないか。地域の人々がどのように水辺を評価して判断しているかを住民に教えてもらわなければ, 施策が地域の暮らしに根付かないのではないか。

また, 下水道が普及する前は, し尿を分離して別々にして肥料として利用するなど, 用排大小便分離型トイレというものが普及していて, 理にかなったつきあい方だった。下水道の出発点は雨水などの不要なものを排除することである。

下水道の整備は過剰な期待をされているフシがある。例えば, 下水道を造れば水がきれいになるが, それはある部分の地域は完全に汚水を排除するのできれいになるが, その地域よりも下流には(京都の場合は淀川)負荷は残ると言うことを知らないといけない。

水質がきれいになるなど下水道整備によるプラスの効果ばかりを今までは広めていた。このような下水道効果を強調しすぎたために, 油, 薬品を流しても良い, 排水先がどのようになっているのかよくわからない, 関心無いなどというような意識を与えてしまった。下水道の整備が万能ではないこと, 効果に限界があることを示してほしい。

例えば, 下水道投資は全国的にみると年間3兆円で, 場所によっては一家族で約700万円であるなど, 大変コストがかかることも示すべきである。そのようなことを踏まえて, 技術を選択できるような幅のある

選択肢を提供する必要があるのではないか。

上田委員

嘉田委員と同様の考えである。コストも大であるが、エネルギー消費も大である。今までの施策は、蛇口をひねれば水が出て当たり前、使って汚した不要な水や、うっとうしい雨水は速やかに流すという整備であった。アスファルトで敷き詰め、直線の川にし、下水道に頼る政策であった。

この結果、保水力の低下も作用した洪水、下水道の氾濫による都市型洪水の発生。合流式下水道の汚水の問題。地下水の減少・地下水位の低下による河川流量の減少、断流。生活が便利になった分ますます水に対して横着になってきた。ますます消費し、廃棄するだけ、上下水道エネルギー消費が増加し温暖化に繋がっている。

貯留と浸透で雨水をうまく利用することを考えるべきではないか。

貯留と浸透にも多くのパターンがあり、流域・都市・農村・山林・事業者・個人などそれぞれに合った方法があり、これらを組み合わせることで、良好な水環境に改善でき、温暖化防止にも寄与できるのではないか。

東京都の雨水利用に関する会では保水型の下水道の整備などを提案しているので（京都でも）検討して欲しい。

野田委員

ユースウォータージャパンでは東京都下水道局と連携して、下水道のオイルボール対策のキャンペーンとして「油断快適キャンペーン」を実施した。駅前などであぶらとり紙、ティッシュ、オイルボール対策のパンフレットなどを配布し、ライフスタイルの中で減らせることを訴えた。また、中華街の飲食店の厨房でどの程度油を排出しているのかなどの調査をした。各地の学園祭の屋台は使用済みの油をそのまま排水溝に流したりしていて、学生の問題意識が低いのが現状である。

水需要については、小雨地域の九州、四国は全国と比べて少ない水でまかなっているなど、水の利用量は地域によって差がある。水の需要量を減らせばダムに頼らないで済むのではないか。そのためには、日常生活で自分たちが使っている水の量や、どのようにすれば水の需要量を減らすことができるのかをわかりやすく提示することが必要である。

藤井委員

水の使い方、下水の問題を知らせるのは簡単である。下水はパイプになっているからわからないのであって、目に見えるところで流すことでわかりやすくなる。問題意識の高い人は良いが、意識が低い人が多いと言える。

上水道と下水道が別のシステムであることに気付いていない人も多いので、下水道だけを考えるのではなく、全体のシステムを捉える必要がある。

節水に対する方法としては、例えば料金を上げるなど、水の利用に対

して金がかかっていることを示すことが有効ではないか。また、環境ホルモンについても技術的には削除可能だがコストがかかる。

普通の生活によって排出される汚染物質は、下水処理で処理すべきであるが、重金属、毒物は流さないようにするべきである。環境ホルモンは PRTR（有害性のある科学物質の環境への排出量および廃棄物に含まれての移動量を登録して公表する仕組み）を利用して、製造元に対する規制によって対応すべきではないか。

山本委員 節水については学校でもよく言われるが、実行している人たちは少なく、水を流しっぱなしにしている人もいる。また、若い人たちは、興味はあるが対応方法を知らないため行動できない。また、実行しようとしていない。

下水道に金がかかっていることを知らない。

家庭でできることは多くあり、まず、家庭のレベルから対策することが重要である。

関根委員 水源を保つにも雨水を大切にすることは重要な行政課題である。そのためには、雨水を守り、育て、活かす条例を作り、行政、市民、企業の役割を明確にする必要がある。

例えば、堀川で雨水を企業や市民の生活に取り込むには、中水道の整備などがあるが、堀川流域を地域指定するなどして、目に見えて形になる対策を行政が誘導して具体化する必要があるのではないか。そのためには中水道の整備、雨水利用について助成、義務づけを行うなどの大胆な政策展開が必要ではないか。有栖川についても同様である。

堀川の原風景として、以前は松、柳、桜があり、水も友禅の染色の水が大量に流れ、チンチン電車が走っていた。堀川に水を取り戻して、地域と一体となって考えるには、地域の人々が誇りを持って、豊かな生活ができると思える整備が必要である。そうすれば、地域の人たちが手や金も出すという動機付けになるのではないか。例えば堀川にチンチン電車を復活すべきである。二条城の西側には遊歩道ができているが、ほとんど人は通らず、夜は暗い。本来は東堀川がその歩く役割を補うような街に再生してこそ、堀川に水をとりもどして町づくりに貢献できるといえる。

チンチン電車の復活と一体となるなど大きな街づくりの中で堀川の清流を取り戻すということが必要である。

栗山委員 資料－３では「河川の平常流量の確保」とあるが、地下水については書いていない。目に見える川よりも、地下水の方がはるかに多くの水がある。伏見地区の地下水の調査を昭和３年と昭和３５年に実施し、これより戦後、地下水量が減少し、地下水位が次第に下がっていることが分かっている。地下水の流量を確保できず、河川流量も減少しているとい

うことがある。そこで、「河川と地下水の平常流量の確保」とするべきではないか。百年、千年の計を立てるため、雨水の浸透について専門家の検討が必要である。

巨椋池が昭和の初期に干拓されたのは、蚊が発生して害をなすことが一因であった。そのため、貯留ではなく流すことが大事である。

また、「保水地域として期待できる山林」とあるが、雨水は森林地域だけでなく、未舗装地域全てから浸透しているので、山林に限定するべきではない。雨水はあらゆる所にまんべんなく降るので、それをどのように確保し浸透させて有効かつ効果的に保水能力を高めるかと言うことが重要である。

上田委員 あらゆる水源を利用することということでは、個人、家庭での雨水利用も重要で、全戸で実施すればかなりの量になるはずである。貯める容量が有れば充分洪水対策にもなるのではないか。

一方で、梅雨時期などでは、貯めた水の使い道がないことが課題となっている。生活用水のうち25%がトイレ排水、20%が洗濯、5%程度が散水として利用されているため、これらに雨水を利用すれば50%の水道水を節水できる。また、雨水は軟水なので洗剤使用量が減るので、下水道への負担が減る。

一人一人の雨水利用から、全体を捉えた下水・雨水利用を考える必要がある。

(連絡事項) 第3回以降の委員会の予定について連絡(第3回委員会は12月6日、第4回委員会は12月21日とする。)

(下水道局塩貝管路部長あいさつ)

(閉 会)

以 上